

令和元年6月27日現在

機関番号：14302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16719

研究課題名(和文)「惑星という庭」の美学的含意 ジル・クレマン影響作用史の確立

研究課題名(英文) The aesthetic implications of "Planetary Garden": On the effective history in Gilles Clement's theory

研究代表者

山内 朋樹 (YAMAUCHI, Tomoki)

京都教育大学・教育学部・講師

研究者番号：10769318

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：ジル・クレマンの「惑星という庭」は、フランスの美学者アラン・ロジェをはじめとするさまざまな評者によって、生態学的ではあれ、美的なものではないとされてきた。本研究では、「動いている庭」の読解を通じてその理論的前提を明らかにした上で、クレマンが当概念を論じる際に言及する植物蒐集の歴史(とりわけ18-19世紀のイギリス庭園)や20世紀ブラジルの修景家、ホベルト・ブルレ・マルクスに注目し、「惑星という庭」が前提としている美的枠組みを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の特色は「惑星という庭」を生態学的観点から受容するだけでなく、「動いている庭」の読解を通じて理論的前提を明らかにし、歴史的な脈を調査してその美学的含意を検討したことにある。「惑星という庭」は同タイトルの展覧会の成功によって人口に膾炙したが、その受容には生態学(というよりも環境保護論としてのエコロジー)への偏向があったからだ。本研究はこの偏向を是正しつつ、近代イギリス庭園およびブルレ・マルクスとの関係を明らかにし、クレマンの庭園および思想を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Gilles Clement's "Planetary Garden" has been considered ecologically but not aesthetically by Alan Roger and others. In this study, we clarified the theoretical premise and the ambiguity of "Planetary Garden" by interpreting "Garden in movement" and by examining the history of English gardens in the 18-19th century and the relationship with Roberto Burle Marx, a 20th century Brazilian landscape artist.

研究分野：美学

キーワード：庭園 ランドスケープ 動いている庭 惑星という庭 ジル・クレマン ホベルト・ブルレ・マルクス
庭園史 自然美学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

開始当初のジル・クレマン研究の背景を確認しておく、まずは主要な研究として、ルイザ・ジョーンズによる『ジル・クレマン』(2006)や、アレッサンドロ・ロッカの『九つの惑星という庭』(2007)といったクレマンの作品写真、設計図、論考を所収した網羅的な作品集、およびフレデリック・パセが著したモノグラフ『ジル・クレマンの四季』(2014)などが挙げられる。これら書籍の狙いは、存命ではありながらすでに評価の定まりつつあるクレマンの庭園やコンセプト、ひいてはその人物像を「資料化」することにある。また、現代までを視野に入れた庭園・ランドスケープ史研究においても、たとえばミシェル・パリドンによる『庭園』(1998)やミシェル・ラシーヌによる『19-21世紀フランスにおける庭と風景の創造者たち』(2002)のように、クレマンに頁を割く者も現れつつあり、上記「資料化」と並行してクレマンの「歴史化」も着実に進展しつつあるのが現状である。

しかしながらこうした研究は、同時代の作家を扱っていることもあり、また、資料が出そろうのを待つ段階にあるからかもしれないが、基本的には事実確認的であり、クレマンの庭園作品と思想についての踏み込んだ批判的検討はあまり見られなかった。数は少ないながらも、こうした批判的研究に先鞭をつけたものとして注目すべきは、クレマンの著書『動いている庭』(1991)にも再録されたアラン・ロジェの論文「動いている庭から惑星という庭へ」(2001)およびジル・ティベルギエンによる対談集『谷の庭で』(2009)などである。これらはクレマンの言説に着目し、同時代的な美学的関心との突きあわせをおこないつつ、クレマンの仕事を読解している。本研究はこうした批判的な庭園・思想研究の流れを汲んでおこなわれた。

前提として、クレマンにとっての「動いている庭」の美とは、種子の散布や地下茎の繁殖によって植物が移動し、庭のかたちを変えることと、それにとまなう驚きにある。植物の生成に庭の美を求めるクレマンの「動いている庭」は、ロジェによれば人為的に構築されてきた、あるいは構築されるべき庭の美を生態学的な所与に還元してしまうという。また、とりわけパリドンやラシーヌによる研究も、クレマンの庭園や思想をたんに生態学的観点で特筆すべきものとして評価している。そしてこうした評価の背景には、1999年に開催され人口に膾炙した展覧会「惑星という庭」がある。

しかしながら、クレマンにとっての庭のかたちは、植物の動きだけでなく庭師による庭の管理や、庭に訪れる鑑賞者の行為によっても等しく規定されており、美と環境のように二分することはできないし、生態学的観点からのみ評価できるものではない。「動いている庭」の形態は複数のアクターが混成することで決定されているからだ。この知見をクレマンの庭園・思想解釈の根底に位置づけることで、生態学的観点でのクレマン受容を再考し、そうした受容を決定づけた「惑星という庭」概念を理解し直す必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「動いている庭」解釈から導かれるジル・クレマンの庭園・思想を基準に「惑星という庭」概念を読み解くとともに、この概念を理解するために重要な参照項となる18-19世紀イギリス庭園美学および20世紀ブラジルの修景家ホベルト・ブルレ・マルクスとの影響作用史を検討することで、これまで主に生態学的側面から評価されてきた「惑星という庭」、ひいてはクレマン受容の偏向を再考することである。

3. 研究の方法

研究方法は、(1)「惑星という庭」の前提となる「動いている庭」を生態学的要素だけでなく、庭師や来園者なども含めた異種が協働する場として検討する。(2)「惑星という庭」の主張を明

確化するため、『トマと旅人』(1997)、『惑星という庭』(1999)、『惑星という庭』(1999)、『庭師の知恵』(2009)といったクレマンの関連文献を読解する。(3)クレマン自身が『惑星という庭』で言及する近代イギリスを中心とする植物蒐集と庭園の関わり、およびブルレ・マルクスとの理論的関連性を検討する。

4. 研究成果

主要な研究成果としては、以下四点がある。

(1) 「動いている庭—技巧、すなわち迂回」

「動いている庭」をその成立段階から検討し、この庭をたんなる生態学的な場としてではなく、庭師や来園者、植物、動物その他の多様な異種がひしめきあう相互干渉の場として考察した。植物を前にしてとられる、放任か根絶か、自由か支配か、自然か文化か、という極端な二律背反的な態度の手前に「いつ、どのように、どれくらい」という多様な程度の諸段階を挿入する可能性をクレマンの思考から掘り出し、人類学者ブリュノ・ラトゥールの着想を援用しつつ、異種相互を媒介する具体的技術として「動いている庭」を位置づけた。本稿での「動いている庭」の理解が、「惑星という庭」解釈の起点となる。

(2) 「なぜ、なにもないのではなく、パンジーがあるのか 浪江町における復興の一断面」

現在復興の途上にある浪江町の風景を庭の観点から論じたもの。パンジーの寄せ植えのように、反復的な身振りがつくりだす、とりあえずつくりだされる形を、クレマンが提起する「第三風景」およびクレマンが想定する全体としての自然に対置した論考。フィールドワークをもとにしているため、本稿では放棄地を記述する「第三風景」から説き起こしているが、背景には「惑星という庭」をこの概念が想定している生物圏という全体性から切り離してとらえることで、震災後の風景が提示する論点に応えようとする意図がある。

(3) 「庭園術」

「惑星という庭」を規定する「閉ざされた場所」というメタファーが、庭園史においてどのように働き、変遷してきたかについて、イギリス庭園から最新の閉鎖型屋内庭園の例までを対象に論じた。とりわけ「惑星という庭」の重要な思想的源泉だと考えられるジョン・クローディアス・ラウドンの「ガーデネスク」やウィリアム・ロビンソンの「野生の庭」など、植物蒐集と結びついた庭園史が、当然のことながら美的関心とも結びついてきたことを指摘。生態学的関心から評価されることの多い「惑星という庭」の源泉に分かちがたく美的関心が存在し、クレマンの実践が質料的水準を形式的水準に繰り入れるものであることを明らかにした。

(4) 「ブラジルの庭園はドイツの温室で覚醒する」

短い書評だが、クレマンが『惑星という庭』で重視していたホベルト・ブルレ・マルクスと「惑星という庭」との関係について論じた。クレマンはブルレ・マルクスがドイツ留学中の植物園でブラジルに固有の植物の美を認識した挿話に着目し、そこに異化効果が働いていることを指摘している。クレマンがブルレ・マルクスを評価するのは、彼がブラジルに固有の植物種を扱いながらも、その根底に、クレマンの言葉で言えば「地球規模の混淆」という庭園の条件と「ずれ」という美的認識を認めているからだ。こうして、クレマンがなぜ『惑星という庭』において庭師・ランドスケープアーキテクトとしてただ一人、ブルレ・マルクスに言及しているのかを指摘した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

・ 山内朋樹「なぜ、なにもないのではなく、パンジーがあるのか 浪江町における復興の一面」『アーギュメンツ』#3、2018年、2-17頁。(査読なし)

・ 山内朋樹「動いている庭—技巧、すなわち迂回」『現代思想』45(5)、青土社、2017年、150-156頁。(査読なし)

〔図書〕(計 1 件)

・ 山内朋樹「庭園術」『美学の事典』丸善出版、2019-2020年頃出版予定、総頁数768頁。

〔その他〕(計 1 件)

・ 【書評】 山内朋樹「ブラジルの庭園はドイツの温室で覚醒する」『図書新聞』3401号3面、2019年6月1日。